

もはや階段はインテリアの一部、斜めやらせん状の線がアクセントに。



周囲の環境に馴染みやすいシースルー階段。階段脇に設けた大きな窓からの景色や光を遮ることなく、上下階をつなぐ。段板のダークブラウンがアクセントに。



らせん階段は、手すり部分を省いたことで、上階からの採光がより効果的に。



段板を壁面と手すりに固定した「FRIS」。扉と段板の色をコーディネートし、手すりはシルバーに。



手すりやささら桁を白く塗った「シースルー階段」。白基調のインテリアに異和感なくマッチしている。



階段アドバイザー

坂田清茂

Kiyoshige Sakata

●1962年東京都生まれ。東洋大学工学部建築学科卒業。カッデンアーキテック代表取締役社長。二級建築施工管理技士。日本で唯一の階段メーカーのトップとして現代の住宅にふさわしい商品を提案。http://kdat.jp

ことを可能にしたのだ。

「シースルー階段は、吹き抜けの光も望める、採光に優れた作りです」

「そして写真下段中央の「FRIS」と名付けられた階段は、さらさら桁をなくした画期的なもの。段板と手すりだけなので圧迫感がなく、見た目に美しい上、狭いスペースにも階段が設置できるという利点がある。これなら、スペースの限られたリビングルームにも、階段と吹き抜けを設けることができる。見た目は繊細そうだが、強度的には他のタイプの階段と比べても、まったく問題ないそうだ。

インテリア性と利便性から、素材、形状、構造を見直す。

階段は本来「手すり」と「段板」、それらを支える「さらさら桁」の3つからなる構造だ。しかしカッデンアーキテックではインテリア性、利便性を追求し、各々の素材や形状に加え、構造そのものにまで幅広い選択肢を用意。

たとえば前述の透明の階段、「シースルー階段」だ。ガラスの手すり、木製段板、シルバーの金属とガラスで構成した、さらさら桁でできている。随所をその名の通り「シースルー」にすることで、窓の外の景色やそこから降り注ぐ光を、そのままリビングに届ける

「子どもにとっては絶好の遊び場。また階段を通る人と下の階にいる人との会話の場にもなります」

さまざま可能性を秘めた階段。その姿を、ライフスタイルに照らし合わせ、いまいちど見直してみる必要があるそうだ。